

黄金ふれあいセンターオープン記念まちづくりフォーラム ～気軽に集まれる地域の居場所づくり～

日時 平成 24 年 10 月 9 日（火）午後 2 時 00 分～午後 4 時 30 分

場所 恵庭市黄金ふれあいセンター（恵庭市黄金南 5 丁目）

プログラム

- ・講演 黄金ふれあいセンターでの「ゆるいコミュニティ」の創り方
北海道大学大学院工学研究院教授 瀬戸口 剛 氏
- ・パネルディスカッション「気軽に集まれる地域の居場所づくり」
コーディネーター 北海道大学大学院工学研究院教授 瀬戸口 剛 氏
パネリスト
NPO 法人えにわ市民プラザ・アイル 泉谷 清 氏
NPO 法人あじさい亭 船戸 實 氏
北広島市「地域のお茶の間」運営委員長 寺岡 和彦 氏
NPO 法人千里・住まいの学校 山本 茂 氏
地方独立行政法人北海道立総合研究機構 建築研究本部
北方建築総合研究所居住科学部居住科学グループ主査 松村 博文 氏

（小野 石狩振興局建設指導課長）

ただ今から「黄金ふれあいセンターオープン記念まちづくりフォーラム」を開会します。私、石狩振興局建設指導課の小野と申します。進行をさせていただきます。よろしく願いいたします。開会に当たりまして石狩振興局長の神から御挨拶申し上げます。

開会挨拶（神 石狩振興局長）

皆さんこんにちは。石狩振興局長の神でございます。本日はお忙しい中、フォーラムに御参加をいただきましてありがとうございます。また、瀬戸口先生をはじめ、道内外からパネリストの方にお越しいただきまして、心より御礼を申し上げます。

ここ黄金(こがね)地区は新しい住宅も多く、若い世代が多いと伺っておりますけれども、石狩管内には昭和 30 年代や 40 年代に造成されたいわゆる、かつてのニュータウンも多く、そこでは住民の高齢化が進み、空き家・空き地の問題も発生しており、地域の自治会の担い手不足といったコミュニティの維持に関わる多くの課題を抱えているところでございます。こうした中、恵庭市におきましては、恵庭、島松の 2 つの地区におきまして、まちづくり市民委員会を設置し、まちづくり構想の策定に取り組まれていると伺っております。また、この黄金ふれあいセンターの建設に当たりまして、協議会を設置いたしまして住民が参画し、基本構想を策定されたことと伺っております。

まちづくりへの住民参加はこれからますます重要になって参りますが、それは行政ばかりでなく、市民、企業、NPO の方々、皆さん知恵を出し合って力を合わせて取り組まなければならない課題であると考えておきまして、石狩振興局では数年前からコミュニティの再生をテーマに管内の市町村と連携しながら様々な取組を進めているところでございます。

本日は、地域の居場所づくりをテーマにフォーラムを開催することといたしましたが、こうした地域のコミュニティを再生していくためには、皆さんが気軽に立ち寄れる居場所を確保することが大切ではないかということで、今回、恵庭市さんと共催で開催することといたしました。今日は、瀬戸口先生から「ゆるいコミュニティの創り方」について御講演いただくほか、道内外からお越しのパネリストの皆様にご地域の居場所づくりの先進的な事例について御紹介いただくことになっております。本日のフォーラムが皆さんにとって有意義なものとなり、地域のコミュニティづくりが、さらに活発になることを願いまして、簡単ではございますが、私からの挨拶とさせていただきます。

(小野 石狩振興局建設指導課長)

続きまして、本日の講師、パネリストの皆様を御紹介いたします。

北海道大学大学院工学研究院教授 瀬戸口剛(せとぐち つよし)様でございます。

恵庭市のNPO法人えにわ市民プラザ・アイル 泉谷清(いずみや きよし) 様でございます。

江別市のNPO法人あじさい亭 船戸實(ふなと みのる) 様でございます。

北広島市「地域のお茶の間」運営委員長 寺岡和彦(てらおか かずひこ) 様でございます。

大阪府のNPO法人千里・住まいの学校 山本茂(やまもと しげる) 様でございます。

北方建築総合研究所居住科学部居住科学グループ 松村博文(まつむら ひろふみ) 様でございます。

それでは、この「ふれあいセンター」の建設に関わってこられた瀬戸口先生からの御講演をいただきます。タイトルは「黄金ふれあいセンターでの『ゆるいコミュニティ』の創り方」です。瀬戸口先生、よろしくお願いいたします。

講演(瀬戸口教授)

皆さんこんにちは。北大の瀬戸口と申します。今日は、恵庭市のこの黄金の交流センターに関わらせていただいた経緯から、このセンターの設計を皆さんと一緒に考えた時の考え方を披露するとともに、これから地域のコミュニティをどうするかについても考えていきたいと思います。

テーマは「ゆるいコミュニティ」。これは、このセンターを作る時に皆さんと一緒に考えたキーワードです。設計に関わらせていただいた時に学生達とテーマを探しました。

最初、市役所から「黄金地区に合った素晴らしいコミュニティセンターを作りたい。」という要望がありました。住民が気軽に使え、地域の住民の皆さんが集えるような、そういうコミュニティセンターにしたい。

うちの学生とどういうコミュニティセンターにしたら良いか話し合いました。話し合いをするうちに「普通のコミュニティセンターを作ったのでは、なかなか使われないだろう。この地域に合ったコミュニティセンターはどのようなものだろう」と話した記憶があります。その時に、学生達と「人と付き合っていてどんなことが大事か」ということを議論しました。

最近、東日本大震災で人とひとの絆が大事。経済的な問題ばかりではなく、やはり人のつながりが大事と巷では聞かれます。その中で、人とひとがつながるってどういうことなんだろうかと学生達と議論しました。単にみんなが一緒にこの場にいないといけないのか。一緒に何かしなければいけないのか。もっと自由なコミュニティがあるのではないのか。もう少し気軽に、もう少し自由で、人とつながりたい時はつながれるけれども、自分が自由にしたい時は自由にできる。そんなコミュニティはないだろうか。そんな時にふっと「ゆるいコミュニティ」ってあるんじゃないか、という話をした記憶があります。この黄金地区は、新しい住人が多いから、昔の集落、町内会のような当番が決まって、何をやってというのではなくて、もう少し自由に集まれる場所がないかと、いろいろ検討しました。

この「黄金地区」がどういう地区か調べてみると、恵庭市内や市外から新しい人が転入して子供が多い。先ほどお話のあったニュータウンとはちょっと違って、今の時代のニュータウンですね。そういう意味で、しがらみが強い町内会ではなくて、もう少し自由に、だけど人のつながりは大事にしたい。気軽な付き合い、気軽なコミュニティを考え、このコミュニティセンターを検討しました。当時のデータを見てみますと、30代と10代の子供が非常に多いのです。この人達がまちの主役でもあるし、その人達を介して、お年寄りと子供が集まれるように、そんな場所考えたのが、そもそものきっかけでした。

「ゆるいコミュニティ」ってなんだろうと、実際に文字にしてみました。ちょっと読ませてい



ただきますと、「ゆるいコミュニティ」を定義すると、現代は人とひとのつながりが希薄になりつつあります。個の生活は充実してきている半面、孤独感が拡がりつつあり、個と個のつながりはますます求められています。従来のコミュニティセンターは、主にサークル活動などメンバーを特定するグループ活動への支援を目的に計画されてきました。そうでなかったとしても、なんとなくそうになっていたんですね。黄金ふれあいセンターでは、それらのグループ活動への支援はもちろん、地域の人々が気軽にふらっと立ち寄って、偶然の出会いがあったり、世代間の交流があったり、そういう「ゆるいコミュニティ」を創っていきましょう。偶然の出会い、世代間の交流をどう創るか。この建物の設計の中で皆さんと一緒に考えてきたわけです。

「ゆるいコミュニティ」とは、どんなことができるか。気軽に立ち寄れる、偶然の出会い、自由な付き合い、くつろげる、居心地が良い、子供が生き生きとしている、これは大事で、子供が生き生きしていないと活気が出てこない。それと、大人と子供がつながる、大人から子供に伝える。そういうことができるには、どうしたら良いか、この設計の中で考えました。報告書の中では、少し堅い方針がありまして市役所の方達と考えたのは「地域コミュニティの拠点」、「生涯学習の拠点」、「児童・青少年健全育成の拠点」、大体こういった言葉は、どんな報告書でも出てきます。こういう堅い方針に加えて「ゆるいコミュニティ」をどう創るかということを考えました。

では、ここから建物の図面や写真を使ってご説明させていただきますが、その時にいろんなテーマが出てきました。地域の住民や市役所の職員とも話して何をしたらいいか、遊ぶ、健康、交流とか、いろいろ考えたのですが、やっぱり真ん中に何かほしいな。いろんな機能があるんだけど、真ん中に何かほしい、真ん中に「ゆるいコミュニティ」の核となる、そういうものが作れないか考えました。今、皆さんがいらっしゃるホール。これがコミュニティセンターの中心となる一番大事な考え方になっています。



最終的にこんな図面になりました。コミュニティセンターを考える時に、真ん中にホールがあって、その周りを廊下でつなぐようにしています。その周りにいろいろな部屋を作っています。なぜこう考えたかということ、真ん中にホールがあることによって、誰かがここに来て、子供が遊んでいる、お年寄りがここに座って話をしている、何かがある。ホールに来た人が立ち寄ることができる。子供がボール遊びをしている、誰かが話をしている。そういうことがすぐ分かるようにしました。それともう一つ、偶然の出会いを創るために、廊下をぐるっと周回させました。普通の建物ですと、廊下は行き止まりになっています。行き止まりだと用事が終わるとそのまま帰ってしまう。それだけではなく、周回させることによって、用事が終わった後、ぐるぐる歩けるようにしました。それによって人と人の偶然の出会いを生み出そうと考えました。これが完成間近の図面になりますが、このようにホールを作って、周りを周回させ、学童クラブだとか会議室とか町内会室等いろいろな部屋をその周りに作りました。建築でこういうプランを考えると、僕が学生の時は、駄目なプランと言われました。なぜ駄目かということ、無駄が多すぎるからです。廊下がぐるぐる回って距離が長いし、部屋がついてくる。壁の面積も多くなり、普通に作るよりはお金がかかる。ですけれども、無駄を作ったところが、「ゆるいコミュニティ」の一つの場所になっています。

それと、配置のイメージ図ですが、外構を作っていきます。向こう側に行くと分かりますが、カリンバの森があって、昔、縄文時代の遺跡が出ました。そのカリンバの遺跡が出たことを一つの象徴として「カリンバサークル」、これは堅穴式住居の大きさを再現して、こういうサークルを作りました。一つひとつの地域の歴史を地域の子供達に感じ取ってもらおうと考えました。

設計をするに当たって、いろんな事をやりましたが風洞実験もやりました。冬になったら雪がどのくらい積もるか実験しました。そういったことも把握しながら設計しました。全体の形の作り方ですけど、このホールを大きな四角として、ホールを中心に周りに回廊を作りました。その回廊が2番目の高さ、その外に部屋がいくつかあります。その部屋が3番目の高さ。会議室や児童館室といった周りの部屋を我々は「カセット」と呼んでいます。大きなボックスの真ん中に、



それを回廊が囲んで、そこに一つひとつのカセットが突き刺さるような形にしています。それぞれの部屋が独立し、みんなが集まるホールと回廊の廊下ができる、そういう風に考えて作ったわけです。実際のプランと図面を見ると、真ん中から外に行くに従って段々下がるようになっています。地域の住民の方からは、「コミュニティセンターじゃないみたい。まるで美術館のようだ。」と言われるくらい綺麗なものができました。これも実際に設計、施工をやっていただきました皆さんのお陰だと思います。

この間、9月16日にオープン記念式典があり、館長さんに伺ったら、月8千人来ているそうです。年間にしたら延べ10万人。地域の方が毎日のように訪れると伺っています。居心地が良いのだと思います。居心地が良い場所を作るのがそもそもの我々の考えでありました。その居心地が、どういう居心地か少しご紹介します。

全体的に真ん中の白いボックスと、周りの回廊を示す黒い部分、それに合わせて児童図書コーナーといった「カセット」が刺さるように作っています。それと庇の部分はさらに高さを下げたなるべく細く見せています。これによってボックスがあって、面があって、線があって、非常に軽い雰囲気演出することができます。色も普通ですとコミュニティセンターでは、ピンクや黄色を使ったりします。なるべく明るい色を使いたい気持ちはよく分かるんですけども、ここではなるべく色を抑えて、周りの緑が映えるようにしています。それと高さも周りが戸建ての住宅地ですので、高さが合うように、突出した高さとならないように、なじむように高さを揃えています。なんととっても開口、この施設は、とにかく窓が多いんです。明るくなるように、外とのコミュニケーションがとれるように窓をたくさん作りました。

当初、敷地内のどこに建てるか議論しました。どこでも良かったのです。カリンバの林の方に近づけても良かったのです。でも皆さんと話をしているうちに、住宅地を歩く人との距離を近くしようと、角のこの場所にこだわりました。地域の住民の方が駅の方から帰ってくる時に、目線が合うように考えました。もう少し遠くなってしまうと誰かよく分からない。ここに立って、友達が来たら、こっちにおいでよと話ができるように、この距離を考えました。このように、なるべく地域の方になじむように、この施設を考えました。エントランスのところも、庇を出して行って、なるべく建物に迎える雰囲気を出しています。恵庭は、花の街ですので、花のプランターで迎えていただくような演出もやっていただきました。



建物に入ると、道産材を使っていますので、それが見えるように、木の雰囲気が伝わるように作っています。入った時に特徴的なのは、天井のところの梁がずっと続いて、木の雰囲気が感じられるように天井を作っていますし、壁の部分も珪藻土を用いて、なるべく健康的な内装としています。最初考えたイメージがこうなのですが、実際こういう風に使っていただいています。入口に入った時に、中にいる人が何をしているか、ぱっと分かるようにエントランスホールを作っています。

例えば、ホールで遊んでいる子供がいたり、学童室で何をやっているか、全て分かるように、中をつなぐように作っています。最初のイメージのとおり住民の方達に使っていただいております。

「ゆるいコミュニティ」というのは、なんとなく人の気配を感じる、自分が遊んでいる、隣の人がお茶を飲んでいる、みんなバラバラなんですけど、なんとなくつながっている。それが「ゆるいコミュニティ」の一番の特徴だと思います。ここではコーヒーを飲んだり、児童館で遊んでいる子供達がいる。それぞれはバラバラなんだけれども何となくつながっている。そういう雰囲気がこの建物の中でできています。



お昼になると子供達が学校から帰ってきて、学童室にやってきます。そのすぐ横で地域の人達

が話し合いをしています。全然関係ない人達なんですけど、すぐ横を通過して、なんとなく関わりを持つ。そういう関係を作っていきます。入口の所も靴が乱雑にならないように、ボックスを設けて、なるべく綺麗に使っていただけるように考えています。靴を履けば、外に出て行けるように、なるべく周辺の住宅地と距離が近くなるようにしました。表に出ていただくと分かりますが、この引き戸を出てから、デッキがあって、ここに枕木のベンチがあって、段差がなく芝生の方に歩いていくことができ、開放的な雰囲気です。外にもつながっていく、そういう形を作っています。

学童クラブの子供達が帰ってくると、まず手洗いをして、学童室で勉強したりするんですが、ただ子供は一箇所にはずっといません。外へ出たり中に入ったり、いろいろな活動をします。その横でおじいちゃん達が談笑していたり、別の子供が本を読んでいる。何となく施設の中でつながる。学童室でも子供達は、生き生きとしています。写真を撮ろうとするとみんなピースをしてくれました。生き生きした子供達がここで絵を描きながら、学習しながら、時には、廊下の方に出てきたり、時にはホールに来たり、自由に活動できるようになっています。

学童室の棚を考える時、いくつか考えました。色も検討しました。ここの椅子の色もそうです。緑の芝生やカリンバの模様をイメージした緑、太陽をイメージした黄色、それとカリンバ遺跡の朱色。この3つを意識して内装のテーマカラーとして柔らかい色で統一しています。外から見るとこういうカセットがつながっているのがよく分かります。このドアを開けると、すぐ外に出ることができます。靴を持って外へ出て、芝生で遊ぶように、なるべく外と内の関係がつながるように考えました。さっき中から見ましたが、外から見るとこのように見えます。ホールがあって、誰が何をしているかすぐ分かります。その時になるべく庇の柱が邪魔をしないように細い柱にして、外と中を一体的にしています。

ホールの作り方も、正式な競技はできませんがバレーボールができるようにしています。子供達が球技で遊ぶ大きさになっています。パネルの一つをはずすと網が出てきて、ホールの間をネットで仕切ることができ、球技をしてもぶつからないようにしています。普段は開放していますが、ここのパネルを閉めると球が外に出ないようにできます。だけど密閉はしない。テーマは「ゆるいコミュニティ」ですので、誰かが何をしているか見えるようにするのが大事なことで、中がのぞけるように小さい窓を付けています。

9月16日には、オープン式典がありまして、この場で盛大なオープニングパーティーがありました。その時にも話をさせていただきましたが、ここはいろんな事ができるようなホールで、このようなフォーラムや、地域の太鼓のお祭りもできるようになっています。いくら音を出しても、活動しても皆さんで楽しめるようになっています。

この部屋の中で特徴的なものとして、児童のための図書コーナーがあります。そこは小さなボックスで作っていますが、中に本棚があって窓が三つ開いています。開いている三つの窓は、子供の成長に合わせています。一番低い窓は幼児が立ち上がった時に、二番目は小学生の低学年が、一番高い窓は小学生の高学年や中学生が外をのぞけるように、中と外の対話ができるようにそういう風に窓を作っています。子供達も楽な格好で読んでいます。気軽にマンガを読んだり、ちょっと座って本を読んだり、そんな環境を作りたいと思います。

学童クラブのところは、外を見るとカリンバの緑が大きく入ってきます。外の緑や太陽の光、そうした自然をたくさん感じられるのもこの施設の特徴です。窓をできるだけ大きくしています。北海道の建築は、寒いものですから大体窓を小さくしてしまいます。それは理に適ったことですが、このセンターでは、なるべく外の自然を建物の中で感じられるようにしています。



この場所も特徴的なところで、ある意味隠れ家のようなところで、建物の両側の隅に図書コーナーを作っています。簡単なテーブルと椅子があって、座るところがあります。ここには、ふらっとお友達が来た時に、読書をしてくれたらと思います。実際に使っている内容を伺ったら、高校生が勉強をしているそうです。高

校生は夜9時まで、中学生は7時まで、小学生は4時までセンターにいられます。これは嬉しい話で、誰かいるところで勉強したい。図書館のようなところだとちょっと堅苦しい。ここで気軽に勉強するような場を提供できるという話を聞いて、非常に嬉しく思いました。

今年は、夏のオープンに芝の養生が間に合わなかったのも、来年、カリンバサークルを使って子供達が遊んでくれるのを楽しみにしています。

外の緑を見ながら本を静かに読みたいと思って、コーナーを作りました。本を読むのでも、閉じちゃだめなんですね。なるべくほかの方の気配を感じながら、一人になりたい。そういうのが今のコミュニティだと思います。それを実現するためにこういった図書コーナーを作りました。

それと廊下には、地域の方が描いた絵を飾っていただいています。今、展示の要望が結構強いとのことで、スペースがなくなっているそうです。地域の方が自分の描いた絵を是非飾ってほしいとのことです。そのうち中学校の子供達の描いた絵を飾る話もあります。そうやって、地域の方達が創ったものをここで飾りながら、コミュニティを創っていく。そういう関係ができると非常に良いことだと思います。さっきの図書コーナーには、少し本を置けるスペースを作っていますが、実は、地域の方達が本を持ち寄って置いているそうです。本だけではなくて、ペーパークラフトとかを是非置いてくれと話が出ているので、地域の方がいろいろなものを展示しながら、間接的なコミュニケーションができるのを楽しみにしています。



それから、なんとといっても大事なのは喫茶コーナーです。一枚板のカウンターで非常に贅沢なんですけど、皆さんが時々ふらっと寄ってお茶を飲んだりされています。一人でお茶を飲んでいて、そこから会話が弾みます。一昨日の子供祭りの時にコーヒーを飲んでいて、子供が一人で来て、ジュースがほしいと言うんですね。ところが喫茶コーナーでは、子供を一人で来ることを許してなくて、必ず家の方と同伴で喫茶コーナーに来てくださいと言っています。喫茶のスタッフの方に「この子の保護者になってくれ」と言われたので「喜んでなります」と言いました。その子供の気持ちになると、大人になったような気持ちになれます。その子供に話しかけたら、近所から来た子で、何か楽しみを求めて、何をやるわけではありませんが、なんとなく来ていました。子供も大人もそうです。そういうことが、求められているこれからのコミュニティの姿なのだと思います。

ほかにもいろいろ写真を御紹介します。トイレと自動販売機の表示が非常に可愛らしく素晴らしいと思います。このような親しみのあるサインは良いですね。



今、子供達が学童クラブに帰ってきていますね。こういう感じなんです。

こうやってフォーラムをやっている途中でも子供が走り抜けると思います。それがこれからのコミュニティの関係というか、わざわざではなく、何となくみんな、地域でつながっています。それが実現できる建築というか「場」が求められていると思います。



一昨日、恵庭の子供祭りがここであり、私も参加させていただきました。ちょっとご紹介します。朝の11時から3時過ぎまでやって、地域の方がボランティアで受付から子供の遊びの道具の貸し出しから全てやっていました。子供も楽しみにして大勢来ています。ホールでは、だるま落としをしました。地域のおじいちゃんが一生懸命教えてあげています。玉入れもありました。子供が一生懸命やるのですが、入らないから地域の奥さん達も入れ始めました。4つの競技をやりましたが大変盛況でした。奥の部屋では、おばあちゃん達が、おはじきやお手玉を教えてあげていました。それからベーゴマを教えたり、



将棋をやったり、祭りではいろんな催しがありました。そんな時に、ちょっと横を見ると、ほかの子供が静かに本を読んでいたりと、絵を覗いている人がいたり、一人で楽しんでいる方もいらっしゃいました。そんな風にいろんな活動ができることは素晴らしいと感じました。向こうの会議室は、音をたくさん出しても良いような会議室になっています。そこではスマイル4 Beat（フォービート）という視覚障がいの方達のバンドが演奏をやっていました。

そんな風に「ゆるいコミュニティ」というのは、今までのように町内会や何かのサークルが全てのプログラムを決めるのではなく、何となく偶然の出会いがあり、人とひとのつながりがあり、なんとなく気配が感じられる。そういうことが大事だと思います。

以前、学生と調査しましたが、スーパーに男性のお年寄りが来ていました。朝の10時から夕方4時くらいまで、ずっとスーパーの中をうろうろして帰るのです。その方達にお話を伺ったら、とにかく人の居るところで過ごしたい。けども何をするわけではない。そんなことも頭の中に残っていて、どんな施設にしたら良いか考える時に意識していました。

今、日本の中で一人暮らしの人が4分の1です。日本には5千万の世帯がありますが、そのうちの25%の世帯は一人暮らしです。たぶんこの中にも結構いらっしゃるのではと思います。そうすると、どこかで誰かとつながりたいんです。けども濃密にはではなく、なんとなく人とふれあいたい。そういう気持ちをどうやってコミュニティに、どうやって建築の中で実現していくかがこれからの日本の社会のあり方にもつながってくると思います。

これからも施設の運営等お手伝いしていきたいと考えています。御清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

(瀬戸口教授)

それでは、後半のパネルディスカッションに移りたいと思います。テーマは今日のフォーラムのテーマでもあります「気軽に集まれる地域の居場所づくり」です。今日は5名のパネリストがお見えですが、皆さんそれぞれご自分の地域でコミュニティ、居場所づくりに取り組まれている方です。それぞれ非常に興味深い取組ですので、これから伺っていきたいと思いますが、一つだけ共通のテーマで皆様にお話を伺うことをお願いしています。それは、地域のコミュニティ、人とひとのつながりを創るのに、どういう風に苦労されたか、考えられたのか。その点について一言ずつふれていただこうと思っています。非常に興味深い取組をされている方ですので、お話を伺っていききたいと思います。まず泉谷さんの方からお願いします。一人10分ずつくらいでお願いします。

(泉谷氏)

会場の皆さん、唐突ですが、子供さんの目というのは、とても輝いていますね。子供というのは、新聞をちぎったり、引出しを開けて物を出したり、積木を高く積み上げていくとき、生き生きとした目をしています。私達だとすっかり目もとろーんとしています。その辺が子供と大人の違いではないかと思っています。この黄金ふれあいセンター。私も土曜日にここでチャリティをやりました。チェリストの土田英順さんのコンサートをしました。ここを使わせてもらって本当に良かったと思っています。この素敵なふれあいセンターができて、「もの」ができて、市民としては幸せだなあとと思っています。私も6月からこの近くに住んでいます。このセンターですが、どんなことができるのかなあ、「もの」ができたけどこれからどうするのかなあ。遅れましたが泉谷といいます。どうぞよろしくお願いします。

今日の我々のキーワードを挙げると2つあるのかなと思います。まず一つは「子供たち」。もう一つは、よく「ものごと」と言いますが、「もの」ができた後、「ごと」をこれからどうす



るか」。この辺がキーワードになると思っています。

私は単身赴任をしていて、平成7年に、勤めたことも住んだことのない恵庭市に参りました。2年の約束で札幌に勤務することになっていましたが、勤務を開始するまでの2ヶ月間、帰ってきたら自分の家なのに、私の居場所がないんですね。単身赴任していた人なら分かると思いますが、私の居場所、行き場所、まして仲間がいないんです。こんなに辛い思いをしたのは初めてでした。このままでは駄目だよなと思いました。すっかり勤め人だけで終わってしまうと。これは恐怖です。これではいけないということで、平成12年に当時の市長の声かけで、恵庭市まちづくり市民会議、市民情報サロンに参加しました。これを二つの柱として行政と連携あるいは関わっていくことになり、今の言葉でいう協働という意識を持ち始め、市民活動に入ったわけです。そこで、「人を知り、まちを知る。」こういうきっかけでした。何かをやるにしても何かネットワークが創れそうな、人とひとのつながりができそうな。これで仲間が増えていきました。一年間で60数回の会議をやって、分厚い提言書を出しました。当時の市長はそれを机の左側に置いて仕事をしたそうです。また、恵庭市で運営していた市民情報サロンですが、6年間開設していましたが、その役割を終えたということで、私どもがその後、市民の交流拠点として、平成19年にえにわ市民プラザ・アイルをオープンさせて、5年半になります。えにわ市民プラザ・アイルのミッションですが、恵庭市民の行き場所、居場所、交流の場所、さらには学びの場所です。学生時代にクラブ活動をやっていたと思いますが、大人のクラブ活動ではないのかなぁと思っています。

それでは、えにわ市民プラザ・アイルではどんな活動をしているのかお話しします。アイルには、1か月に1,200~1,300人が来ています。ほとんどがお母さん達です。こうやって集まり、何かをやって、仲間づくりをしています。スライドの左上ですが、正月には「えこりん村」と連携して餅つき大会をやっています。それから、獅子舞をやっています。右下ですが、去年、福島の二本松から恵庭に子供達が遊びに来ました。その時の様子です。左下ですが、若い子供達がアイルの中でライブをやっています。普段は展示をしたりコミュニティレストランをしていますが、人が集まる仕掛けをしています。皆さんも気楽に過ごしています。ここもそういう風になればいいなと思っています。次にシーニックバイウェイですが、右上の写真は新潟県の十日市市、左側は兵庫県の丹波篠山です。北海道と本州で行っている「全国あかりサミット」の写真です。この写真のアート作品なんですけど学生が作ったものだと思います。十日市ですが、小さな集落がいくつもあるんですね。棚田があって、あんな山の上にも集落があるんだと思いましたけど、ところがやっぱり子供が少なくなってきた。学校も閉校してしまっただけでその跡でアートのまちづくりをされています。

シーニックバイウェイの取組は2004年から始めて8年目になります。「ルックルック調査隊」といって、恵庭のまちを見ようじゃないか。恵庭には、金山の跡が残っているなど、資源がたくさんあります。シーニックバイウェイの取組の中では、シーニックナイトが有名だと思います。2月の中旬に、ろうそく15,000本で地域全体を飾っています。もしかしたら北海道で一番大きくやっているんじゃないかとも言われています。

先ほど瀬戸口先生からお話しがりましたが、本当に素晴らしい建物ができました。これからのように活用するかが、これからのテーマと思っています。黄金の街全体を見ますと、今年の6月の数字ですが、黄金中央と黄金南地区で6,033人います。若い人20代~40代が46.5%います。子供も含めた40代以下の人では77.1%も黄金地区に住んでいます。50代と60代は同じくらいの人数で、70代以上の方も相応にいますから、非常にバランスが取れています。今度は、もう少し小さく分けてみました。黄金中央地区を見ると1,696人いて、20代~40代が48.2%、40代以下の人では70.1%になります。思ったよりも50歳以上の方がいますが、恵庭駅に近く、この開発をする前から住んでいる方々や退職して恵庭に住む方がいらっしやいます。こういう特徴があります。次は、黄金南地区ですが、4,480人おりまして、20代~40代が47.4%です。40代以下の人では80.5%になります。黄金中央と黄金南を比べますと黄金南の方が若い人が多い。黄金中央に比べ20代が少ないですが、恐らく文教大学が黄金中央にあるためだと思います。ほかにも面白いデータもありますが、時間の関係もありますので何かの機会にお話したいと思っています。ありがとうございました。

(瀬戸口教授)

ありがとうございます。恵庭の地域での活動についてお話いただきました。今度は江別の大麻ニュータウンでNPO法人あじさい亭を運営されている船戸さんの方からお話をお願いします。

(船戸氏)

皆さんこんにちは。隣の街、江別から参りました船戸でございます。このような立派なふれあいセンターができて、心からお祝いを申し上げます。それでは、コミュニティづくり、人とひととのつながりを地域でどうやってきたかお話ししたいと思います。

これは、私たちが手づくりした「あじさいパークゴルフ場」の紫陽花の花です。私たち高齢者が1本ずつ挿し木をしたり株分けをしたりして、現在約400本の花が、シーズンには私たちを慰めてくれます。地域での「交流拠点」でございますが、今日のテーマは「居場所づくり」でございますが、あえて「交流拠点」としてしています。交流拠点を創るから、ここを居場所にするなり、たまり場にするなり、仲間づくりの場にするなりは、どうぞ集まってきた方が勝手に使ってください、そういう拠点を創るという理念です。

2001年に66歳で定年退職しましたが、その時は地域では孤立しておりました。そこにパークゴルフ場を作ろうという仲間7名が集まったのが始まりです。夢ですが「このまちの三世代が交流できる“いやしの広場”を手作りしよう」、それが夢です。場所は札幌盲学校の協力を得てお借りしています。これが始めた時の荒れ地です。雑草を刈り払い、整地し、雑草を抜き取り、芝の刈込、散水。作業を仲間数名で行い、オープンまで2年の歳月を費やしました。2003年5月、待望のパークゴルフ場を完成させました。これは、孫世代と交流を楽しみ、そして孫世代が健全に育ってほしいと交流を深める仲間です。これは、パークゴルフ教室です。地域の子供たちに大人の知恵、マナー等を伝達できればと月に2回実施しました。これは、自治会の愛のふれ合い活動です。江別市では、一人暮らし高齢者の交流の輪を創ろうという取組を愛のふれ合い活動とっております。その活動にも我々の作ったパークゴルフ場を無料で開放しています。ここで三世代が交流する会を毎年実施しました。オープンしてから、ここで楽しんでくれた方が62,000人ほどもです。盲学校や地域の子供達の課外学習のサポートもこの場でやっております。

10年経って運営体制も安定してきました。そこで、「インドアのたまり場がほしい」という、つぶやきが出てきました。「冬何してるの？冬も逢いたいねえ。」、「パソコンの勉強をしたいんだけど誰か教えて」、「気軽に仲間とお茶会できる場所ほしいね」、「何か趣味で集まれる場所ほしいね」、「仲間とちよいと一杯やれる場所ほしいね」、こんなつぶやきが出て参りました。そこで、私たちのたまり場、出場所、居場所、舞台を創ろうと有志が集まって始まりました。「高齢者の住みよい福祉のまちづくりを少しでも自分たちでやろうよ」、「老老互助の福祉の推進といやしのひろばづくりをやろうよ」、このような目的を定款で定め、事業を決めました。「市民の交流拠点を作って運営しよう」、「市民の各種学習活動を支援しよう」、「市民の交流活動を支援しよう」、「市民の保健福祉活動を支援しよう」。こんな目的を作りインドアの交流拠点づくりを開始しました。

まず、折衝の結果、元の喫茶店を商店街のシャッター街の中に借りることができました。これはお借りした時の内部の写真です。倉庫となっていました。清掃作業、産廃物の搬出、床・壁・天井もピカピカに磨きました。2009年11月、あじさい亭をオープンさせることができました。

自治会のご近所交流活動を支援しています。定番メニューとしては、手打ちそばや笹寿司弁当、特製幕の内弁当等でお年寄りの交流を支援しています。これは、江別市食生活改善推進協議会の有志の方に作っていただいた手作り弁当を地域の高齢者が召し上がっているところです。ここでは持ち込み自由、飲み物はお代わり自由で1日200円で交流を楽しむことができます。ヤマベーパーティは、仲間が釣ってきたヤマベを厨房で揚げて食べます。人気定番メニューは、寿司パーティ、餃子パーティ、家庭菜園で採れた収穫物の収穫祭でございます。肉・魚・野菜を焼く「あじさい亭夏祭り」。今年の夏は、焼き鳥とビールで地域の皆さんと交流を図りました。開設以来毎年実施し、今年で3回目になります。パソコン教室は、初級・実践・インターネット講習を開催しています。麻雀大会も人気で、毎月一回やっています。活動の現状として、喫茶交流、食事会

交流、パソコン教室、麻雀会交流、各種サークル活動支援、交流者数は毎月 340～370 名ほどの方に交流を楽しんでいただいております。以上で私たちの活動の紹介を終わります。御清聴ありがとうございました。

(瀬戸口教授)

ありがとうございます。続きまして、お隣の北広島市で地域のお茶の間を運営されている寺岡さんから活動をご紹介させていただきます。

(寺岡氏)

寺岡和彦です。私の出身地は樺太です。北広島団地に住んで 30 年になります。こよなく団地を愛しています。緑が多くて、安全で、周りには美味しいものがある、こんな良いところはないと思っています。それを気づかされたのは、私の息子が東京に行って帰ってきた時に「お父さん、この住宅を手放さないでくれ。」と言われ、初めて良いところに住んでいるんだなと気づかされました。そういうことがあって、瀬戸口先生が委員長をやっていた「北広島団地活性化検討委員会」の公募委員として参加したのが、まちづくりに目覚めた動機・きっかけです。議論の中で、地域の活性化のために「地域のお茶の間事業」を行政としても、住民の理解・協力を得ながら立ち上げようということになりまして、瀬戸口先生が「できることはすぐやろう」とおっしゃいました。議論のさなかでしたが 2009 年に社会実験として始まり、私も参加しました。社会実験は翌年の 3 月に終わりましたが、引き続き地域の住民で、地域のお茶の間事業を継続しようということになり、先月で 40 回目の開催となりました。

目的はいろいろありますが、団地の住民が集う場所を提供すること。集った人達がつながっていける、友達になれる。音楽集団に来てもらうことによって、団地の中に音楽があふれる。その延長線上に、住民が孤立し悩んでいる、そういうことを無くすきっかけになるかもしれない。様々な目的を持って始めました。市の北広島団地活性化計画に基づいて運営しておりますので、市のまちづくり活動交付金制度から今年は 16 万円の助成を頂いております。集った人たちがテーブルに置いた貯金箱に 100 円玉を入れてくれます。年 14 回開催して年 7 万円になるかどうかです。

かかる費用は「地域のお茶の間だより」の印刷に 9,000 円程度かかります。配布は町内会長にお願いしていますが、自治会からの助成は一切受けていません。講師や出演者の謝礼や交通費は平均すると 3,000 円です。年 14 回の開催ですから相当かかります。

開催場所は、最初は若葉小学校でした。当時の校長先生にお願いしたところ「多目的室をどうぞ使ってください。ただし年度の終わりと始まりは学校行事のため使えません。」という約束でした。学校行事がちよっと多くて不都合もあったので、団地住民センターをお借りしました。一昨年の 12 月 1 日に団地のほぼ中心にあったスーパー銭湯が改造されて、地域交流ホーム「ふれて」になりました。そこを使ってくださいと施設長さんからお話がありまして、以降約 2 年間、そこを使わせていただいております。

どういう人が集まるかという、8 割は高齢者です。1 割は 2 階のデイサービスの利用者です。残りは子育て世代です。子育て世代が来られると、お年寄りや赤ちゃんが来ると喜びますが、子育て世代は、なかなか来てくれません。

どういう行事をやっているか、今年でいいますと、大正琴の演奏会、おやじバンド、民謡、北海道大学の落語研究会の落語会、ハーモニカ、クラシックギターの演奏、福島県飯舘村から避難されてきている方の講演、先月は津軽三味線のメンバーに来ていただきました。結果として高齢者が多いです。時々、演目によっては子供、子育て世代が集まります。平均すると 60 名から 70 名が集まります。一番人気なのは、おやじバンドで 100 名を超えます。先日の津軽三味線も珍しいこともあって 80 名が集まりました。

いくつか成果はありますが、悩みという課題もあります。解決できない課題もいくつかあります。克服した課題は一つしかありません。それは出演者探しですが、初めは苦勞しましたが、今は団体の方が手を挙げてくれて非常に助かっています。解決できていない悩みは、ボランティアが少ないことです。スタート 7 名で現在は 11 名です。時々運営委員が声をかけますが、なかなか集まりません。役所の OB、元学校教師等、そんな方たちが手を挙げてくれます。

60、70名集まりますと、喫茶コーナーでコーヒー、お茶、紅茶を無料で出していますが、その人手が足りません。行事の演奏者の人数が多くなりますと、そのおもてなしが大変です。いろいろな苦勞があります。

私どものお茶の間が担当しているのは第2住区という駅から15分から20分くらいの地域で、約3千人くらいが住んでいると思います。区域外、団地外、あるいは札幌からも口コミで参加されるようになりました。

話は変わりますが、昨年3月11日の2日後に、おやじバンドの会をやるようとしていました。11日は「ふれて」にて大型の画面で（東日本大震災を）目の当たりにしました。悩みました。こういう時にやっぴいものか2日間悩みましたが、やることにしました。黙とうを捧げ、チャリティで寄付金を集める。たぶん全国で最も早いチャリティコンサートではないかと勝手に思っています。これを機に福島県支援を去年の4月から始めました。一つは福島県の特産品を団地住民に利用していただく、また、福島県から避難している人達をお呼びしてチャリティコンサートをやりました。それから、飯舘村から避難している子供達に夏休みに遊びに来てもらいました。そういった活動をこの1年間やってきました。

また、今回で4年目になりますが、JICAの研修生を地域のお茶の間にお呼びして、日本の文化を理解してもらいながら一緒に集うということをやっています。これは定着しつつあり、今年JICAが運転手・通訳も付けて20名参加しました。

「つながる心、つなげる地域」を合言葉にこれからもやっぴいこうと思っています。御清聴ありがとうございます。

（瀬戸口教授）

どうもありがとうございます。先ほどから学童の子供たちがこっちを覗いていっていますが、こういう微笑ましい光景が、このセンターの良い所だと思います。

続きまして大阪の千里ニュータウンから遠路はるばるお越しただいております山本さんから、千里ニュータウンの取組についてご紹介いただきます。千里ニュータウンというのは、大阪万博の少し前にできたニュータウンで、日本のニュータウンの先駆けです。そういう意味で、高齢化といった問題も、その取組もトップランナーとして大変興味深い取組をされていますのでお話いただきます。よろしくお願いします。

（山本氏）

大阪からお呼びいただきまして、楽しみにやっぴい参りました山本です。よろしくお願いします。プロフィールにいろいろ書きましたが、もっぴい千里でこんなことやっぴいしていますということをお話します。私は、岡山県の北部にある津山という街で生まれ、大学は京都に8年もおりましたが、オイルショックの後、就職先がなくて、いやいや千里ニュータウンの設計事務所に入りました。最初、建築設計をめざしていたのですが、徐々に都市計画、まちづくりに携わようになり、28年間過ごしました。2000年以降、千里の市民活動に参加するようになり、専門家&市民として今も関わっています。高齢化が進む千里では、これからは高齢者の住まいの問題が大切になるだろうと思って、住み替え、住み続けのサポートをしようと、2004年にNPO法人千里・住まいの学校を仲間と立ち上げました。ところがNPOではなかなか食えないという事情もあって、今は、片道2時間以上かかる兵庫県の丹波地域に週3日、農村部のコミュニティ再生のために3日間出かけています。週末の土・日・月曜には、千里で活動しています。

千里ニュータウンをご存知でない方もいらっしゃると思いますので、概略説明させていただきます。千里ニュータウンは、大阪都心から地下鉄で15分、大阪国際空港まで約10分、新幹線新大阪駅まで約10分、高速道路網（名神高速道路、中国自動車道）に接続するなど、非常に便利な場所にあります。万博公園の近くにあり、面積は吹田市と豊中市にまたがる1,160ヘクタールです。今年まちびらきから50年を迎え、市民が中心になって記念イベントを進めています。

2005年までの人口のデータですが、元々13万人くらいの人口が、どんどん減って9万人を切りました。世帯数は変わらないのに人口が減るということは、子供が出ていくことによって一世帯当たりの人数が減ったということです。ただ、建て替えが進んで若い方が入ってきているので、

2010年には再び9万人を超えました。高齢化率は、全国平均を下回っていましたが、あるところから追い抜き、今は30%を超えています。戸建て住宅地では40%を超えているといわれます。まるで都会の中の過疎地ですが、建て替えが進み、若い方が入ってきて、少し元気なまちに再生されつつあります。

ニュータウンにいろいろな問題が出てくることを「ニュータウンのオールドタウン化」と言っていますが、こういうふうに老夫婦が寄り添うような姿が見られたり、ショッピングセンターに空き店舗が目立ったりします。一般的な5階建てのURの住宅ですが、階段しかありませんので高齢者の登り降りが大変です。この建て替えられた19階建の分譲集合住宅は、高いなあ、ちょっと違和感があるなあと感じます。建て替えに関する合意形成が難しく、この集合住宅は最高裁判所まで行って決着がつかしました。これは大阪府住宅供給公社の賃貸住宅を建て替えて、「賃貸住宅+高齢者施設」に変えた例です。こちらは「都市の記憶」として、元々あったメタセコイアの木を残しながら建て替えた例です。これは建て替えによって、公的住宅の1階にできたコミュニティカフェです。こういったカフェは千里にいくつかあります。千里中央は一番賑やかなところですが、なんと50階建てのマンションが建ちました。最初びっくりしましたが、建ってみると意外に高すぎないと感じます。以上が千里ニュータウンの概況です。

今日のテーマは、コミュニティです。「ひがしまち街角広場」は2001年に始まった地域のコミュニティカフェです。瀬戸口先生や松村さんにも数年前に来ていただきました。これが千里で果たした役割は、非常に大きいです。なぜできたかという、国土交通省のプロジェクトで「歩いて暮らせる街づくり」という構想があり、全国20箇所のモデル地区の一つとして新千里東町が選ばれ、住民参加型でまちづくりの構想を作りました。提言された7つのプロジェクトの一つが「地域の空き店舗をコミュニティに活用しよう」でした。

ひがしまち街角広場は、この地域に喫茶店がなかったこともあって住民に歓迎されました。リーダーである赤井直さんと約15名のスタッフによって、10年間運営されてきました。これは昨年の10周年の記念の事業の様子で、地域の有名な太鼓グループが演奏したり、みんなでバーベキューを楽しんでいるところです。カフェの中では、100円でコーヒー、紅茶、ジュース、カルピスが飲めます。千里の地図や川柳や写真などが貼ってあって、パンフレットが置いてあって、千里の歴史・年表もあります。いつ行っても誰かと会って話ができて、コーヒーが飲める。話さなくてもずっと聞いている方もいます。当初は、高齢者が中心だったのですが、そのうちに子育ての若いお母さんが来るようになり、子供をスタッフに遊んでもらいながら、お母さんたちで交流しています。時間は、11時から夕方4時までの5時間です。スタッフのシフトは曜日でいたい決まっていますが、空きが出る日には「私が来るわ」という感じでカバーし、2名が半日～1日を単位に出ています。報酬はなしです。彼女達は弁当を持ってきて、喫茶のサービスをしながら話をするのが楽しいと言っています。誰々さんが病気だとか、今度こんな行事があるので参加してねとか、いろんな地域の情報が集まってくるので、自然なうちに情報が共有できる場にもなっています。夕方4時以降は貸切になり、1人100円（10人だと1,000円）の会場費で、お隣が酒屋で、近くにスーパーもあるので、すぐにパーティができます。

「千里市民フォーラム」は、ゆるやかな人々のネットワーク組織といったものです。まちびらき40年の2002年に、行政の呼びかけで40人の市民が集まり、市民が中心になった「千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム」を企画・開催しました。それがきっかけとなって、翌年の4月に、せっかくみんなで集まったのだからと「千里市民フォーラム」を立ち上げ、今年で10年になります。その時々テーマで月1回のサロンや年1～2回のフォーラムを開催し、交流しています。マンネリ化傾向も見られましたが、最近リーダーが若返ったこともあって活発化し、去年は「千里ひとびと見本市」を開催しました。100人くらいメンバーが自分の顔とプロフィールを貼り出して、お互いを紹介し合うマッチングの場です。「この人はこんなことができるんだ」と分かって、「じゃあ一緒に何かやろうか」という話になります。

また、「千里でやってみたいこと大プレゼン大会」を今年2月に開催しました。10数名のメンバーが「こんな事がやりたい」と発表したあと、自由に動き回りながら「自分も一緒にやりたい」「〇〇さんがサポートしよう」と話し合いました。

これは、今年の「千里ニュータウンまちびらき50年事業」で全国から公募で集まった300点

以上のシンボルマークの審査をしているところです。NPO の代表、連合自治会の会長、まちあるきの専門家、イベント会社の人、広告代理店に勤める人、司会が得意な人など、いろいろな人がいますが、大半が千里市民フォーラムのメンバーです。こういう感じで 50 年事業を進めています。

私が代表を務める NPO 法人千里・住まいの学校では、住まいとまちづくりの支援をミッションに、住まいの見学、住まいの相談、まち歩き、調査研究などを行ってきました。今年は、吹田市・豊中市の依頼により、千里を知らない子どもを対象にした副読本「私たちの千里ニュータウン」を作り、ニュータウン内の全小学生に配布されました。

千里中央地区にあるコミュニティ拠点「豊中市千里文化センター（コラボ）」は、2010 年にできました。図書館、公民館、老人センター、市役所出張所の 4 つの施設からなる複合施設ですが、入ったところに多目的スペースがあって、端っこにカフェがあります。コンセプトや空間の作りがこの「黄金ふれあいセンター」に似ていると思いました。カフェは市民の実行委員約 15 人で運営しており、私も委員の一人です。1、2 か月、カフェのスタッフをやっていたのですが、なかなか時間が取れなくて挫折してしまいました。コーヒー、紅茶は 200 円、ジュース、カルピスは 100 円です。

ここでは、カフェ横の多目的スペースや会議室などを利用して、市民の企画による各種のプログラムが展開されています。これは、市民が講師になって月 1 回講座を開いている「コラボ大学校」です。源氏物語を原文と口語訳を読んで味わっているところです。これは私が主催している「コラボ談話室」で、20 代から 80 代の人が 20 名くらい集まり、15 分くらいの話提供のあと、お茶を飲みながらフリートークをしています。瀬戸口先生もおっしゃったように、多世代で集まって、いろんな考えがあることが自ら分かる、あるいは世代間のギャップを埋めるような場になればと考えています。

「ひがしまち街角広場」や「千里市民フォーラム」がきっかけとなって、いろんな組織が生まれ、100 人くらいの人がゆるやかなネットワークでつながりながら、いろいろな活動をしています。千里ニュータウンの再生だけではなく、地域のコミュニティに大切な人々のつながりのようなものも、この人達が多くを担っていると思います。1962 年が「まちびらき元年」であれば、市民活動が活発になった 40 年後の 2002 年が「まちづくり元年」と言えます。そして、千里市民フォーラムのメンバーを中心とする様々な活動が約 10 年続けられて、今年の「まちびらき 50 年」を迎えています。以上で終わらせていただきます。

（瀬戸口教授）

どうもありがとうございました。私も「ひがしまち街角広場」のカフェをお邪魔した時、皆さん和気藹々と話している中、一人だけずっとだまって座っているおじいちゃんがありました。そのおじいちゃんも楽しいんですね。なんか人とつながりを求める。あまり強制的に話をするのではなく、その場にいるというだけでも楽しい。居場所が大事ということになると思います。

最期に松村さんの方からお話をお願いしたいと思います。その後で、一言ずつ皆さんにお話を伺えたらと思います。それではよろしく申し上げます。

（松村氏）

北方建築総合研究所の松村でございます。研究所は旭川にありますが、平成 14 年まで札幌の琴似にありました。道庁の研究所として昭和 30 年に発足し、古くはブロック造の三角屋根の住宅を開発しています。私は、まちづくり分野を担当しています。今日はコミュニティの話ということで、私から 3 点お話をさせていただきます。一つは「コミュニティの再構築」、それから「町内会活動や PTA 活動が沈滞化するのなぜか」、それから「子は地域のかすがいい」についてです。

先ずいくつかのデータを見ていただきたいのですが、これは阪神淡路大震災の時の応急仮設住宅に入った人で、神戸市に 3 万戸あったのですが、孤立死の人数です。1 年間で 102 人孤立死されました。その 7 割は男性です。何を申し上げたいかというと、この時は元々のコミュニティと関係なく抽選で入居しました。コミュニティのない所で生活すると、こういう状態になってしまうということです。一方で、これは児童相談所における児童虐待相談対応件数です。右肩上がり

で増えています。地域から孤立するのは高齢者とのイメージがありますが、実は、子育て組も地域から孤立しているのが現状です。次に、これは近所付き合いについてのアンケートで、これは内閣府が行ったものですが、年々近所付き合いが減っている状況です。2007年という「よく行き来している」というのは10%です。

このグラフは私の地元の旭川で活動している近文地区で、子どもの安全安心のための見守り活動を高齢者が中心に行っているところです。活動が始まって間もなくの時に、同じ町内会の子ども110番のメンバーが、同じ町内会の子どもの顔をどのくらい知っているか調べました。子どもが10人いるうちの2.5人しか分からないという人が過半でした。よく地域では、挨拶運動をやっています。そこで聞く声は「最近の子どもは、挨拶をしても返事をしないんだよね。」という話を聞きますが、返事をするわけがないんですね。なぜかという挨拶をしてくれる人が自分達を見守ってくれている地域の人だという認識がないからです。子どもは知らない人に声をかけられても相手をしては駄目と教わってますから、まず交流から始めなければならないということです。

この数字を見て地域の方もぎょっとして、交流の場を作ろうということで、いろんなことをやりました。昼食会をPTAが開き、日ごろ見守ってくれている高齢者をお呼びしたり、小学校の総合学習で体育館に集まって、自分たちの住んでいる場所、110番の場所の確認をしたりしました。それで2年間活動した後で同じようなアンケートをとったところ、さすがに4分の1しか知らないということは半分近く減ったということで成果を上げています。こういう風に、いろんな交流が必要だということと、人々の交流の度合いをちゃんと目に見える形で見せることも重要だと思います。成果・効果が見えると楽しいです。

次に町内会の話ですが、これはPTAも全く同じなのですが、旧態依然、20年前と同じ活動をやっている町内会が山ほどあります。右肩上がりの時にはお金で解決できましたが、今はそういう時代ではありません。その時に町内会が果たすべき役割は非常に大きくなっています。しかし、町内会活動が今の課題に対応しているかどうか。正直に言いますと、していないのではないかと思います。ではどうすればいいかという、一つは課題を明確にすること、課題に対して何か対策を考えるということです。その時に大事なのは、できることをすぐやるということ、駄目だったらすぐやめるとことです。役所もそうですが一度やりだしたら、やめるのは勇気がいります。効果が上がらなければやめたらいいのです。そういう意味では、社会実験としてするのは、有効なことだと思います。

地域活動では高齢者が一肌脱ぐと書いていますが、地域で地域のことをよく知っていて、地域に愛着のある高齢者がいろんなことをやる。その時に、地域を運営するという意識が必要だと思います。行政の役割ももちろんありますが、行政にお願いするだけではなく、自分達自らが地域のいろいろな課題を解決していくことを考えていく。ついては、それがコミュニティづくりに役立つ。そういう意味では地域の課題は、人をつなぐ大きな宝だと思います。

もう一つ、先ほど「見える化」とお話ししましたが、地域の課題を目に見えるようにしようということで、子どもにアンケートをして、どこで危ない目に遭っているか、何人が危ない目に遭っているか、マップ上に数字で表したものです。危ない場所が線的に出てきたのですが、なぜ危ないかというと抜け道になっていました。なぜ抜け道になっていたかという、一時停止がありませんでした。狭い6m道路なんですけど、車が通り抜け、子どもが危ない目に遭っている。一時停止を付けてほしいと公安当局にお願いするとともに、自分たちでできることとして学校は通学路を変える。このような活動をすると、やっている方もモチベーションが上がります。特にこの活動にはお父さん方がたくさん参加してくれました。お父さん方を地域活動に参加してもらうのは大変なのですが、マップを作って対策を考えると、俄然やる気満々でやっていただきました。

最後は、子どもの話ですが、子どもは地域コミュニティ構築の最強のツールだと思います。また、それに関連して、高齢者を「サービスを受ける人」というイメージから脱却し、「サービスを提供する」側になることが重要だと思います。

今日は、この建物を見るのを楽しみにしていましたが、多くのまちで、子育て支援センターを作り、子育て組だけが集まれる場所として、ものすごく賑わっています。それは、すごくもった

いないと思います。この建物のように子どもがいれば、それを楽しみに来る高齢者もいます。子どもを見ていると癒されます。そういう意味では、子育て組が集まるところに高齢者がいろいろな活動ができる場所を作り、先ほど瀬戸口先生がおっしゃっていたことをやっていると良いと思います。

例えば、趣味の活動を高齢者の方はやっています。それを自分たちの趣味の範囲で終わらせないで、紋別での例ですが、「焼き絵」というものを楽しむ高齢者のサークルが、子ども達向けの夏休みや冬休みの自由研究として、子ども達に教える会に展開しています。今行っている事業をつなげる場に変える工夫、そういう方法も有効ではないかと思います。以上で終わります。

(瀬戸口教授)

どうもありがとうございました。残りの時間で、パネリストの皆様にご共通で一つの質問をしたいと思っています。コミュニティづくり、地域の居場所づくりが今日の大きなテーマですが、場所を作ると人が集まるのではなく、自然に人が集まるのではないかと思います。皆様は、その場所に人を集めるいろんな工夫をされていると思います。そこでお伺いしたいのは、人と人をつなげる工夫として、どういうことを大事にされているか順番に泉谷さんからお願いします。

(泉谷氏)

人と人をつなぐ。誰もが集まれる場所、舞台を作ることが一つ。演技をするにも舞台がなければできないですから。プロデュースをする人を養成する。自分の出番を作ってあげる。それが大事かと思っています。

(船戸氏)

10 数年やった経験から言いますと、まず自分達でできることを自分達でやる。我々企業社会で投げつけられた人間は、地域では孤立します。一番大事なのは、信頼できる仲間、信頼されている仲間を一人でいいから探すことです。その一人が二人、三人になりネットワークになる。そういうものが大事です。経営資源には人・もの・金・情報があると言われます。まちづくりでも、経営資源は人づくりといいますが、簡単に言うと信頼できる仲間を一人でもつくる。仲間ができたなら夢を語り合います。「夢なくして目標なし。目標なくして実行なし。実行なくして成果なし。成果なくして喜びなし。喜びなくして人生なし。」いい人生であったかどうかは、感動の数に比例するそうです。我々高齢者は感動を求めて活動し、活動を動かすには信頼する仲間、共有の夢を持って、連帯感に基づくチームワークを持ち、自分たちのできることから始める。以上でございます。

(寺岡氏)

私は、人が集うというのは「飲むこと」、「食べること」、「しゃべること」だと思っています。そういう人生を送ってきました。活動拠点にしている「ふれて」では、社会福祉法人のため、「飲む」のは駄目なんです。認められたのは、「ふれてフェスティバル」でビールを 200 円で売ること。反省会で日本酒を飲んでいいことくらいです。それで「食べる」で勝負するしかない、エゾシカ肉のシチューや岩見沢特産のキジ肉のシチューを売っています。工夫して興味を持った方に集まって頂いています。上手くいったかどうかは分かりませんが、来て良かったと言っていたいております。

「しゃべる」というか語り合うというのは、こういう事業に携わって分かりましたが、初対面の人同士では、ほとんど駄目なんです。北海道人がそうなのか、関西に行ったら違うのかは分かりませんが、仲人がいないとだめですね。これの解決策はまだありませんが、重ねることによって、参加者自身が解決していくことなのかなとも思っております。



(山本氏)

人と人をつなげる工夫・・・。なかなか出てきませんが、私は、自分達のまちを自分達で考えるのは、当たり前なことかなと思っています。人と人が集まって笑顔が生まれたり、地域が変わっていくのは、とても素晴らしいことです。そのために、何かいろいろやっていくのだと思います。そのためには、やはり、まず自分が楽しむこと。楽しみましょう。しかめっ面をして「地域づくり」「まちづくり」を言うのではなく、ゆっくり楽しんでいくと良いのではと思いました。

(瀬戸口教授)

千里ニュータウンを訪問した時は、住民の皆さんが、自分のまちを愛していましたね。そういうところも見習っていきたいと思いました。

(松村氏)

旭川で子どもの安全の活動を一緒にやっていますが、高齢者が見守り活動をやっています。当初は「ジジ、ババにやらせて保護者は何をやっているんだ」という意見も出ました。今は、高齢者が、楽しく生きがいを持ってやっています。そうすると地域が変わってきまして、高齢者に感謝するようになりました。災害時の避難について考えるワークショップを開催すると、通常は、災害時の弱者である高齢者や障がい者しか集まらないことが多いのですが、この地域では子ども達、保護者が高齢者に感謝していますので、一肌脱ごうとPTAを含めて若い方達が参加してくれました。高齢者は子ども達のためだけに活動していたわけではなかったのですが、結局は、自分のため地域のための活動になっています。

地域で大きな課題が見当たらない時には、「子どもを守る」ということが、地域をつなげるきっかけになるのかなと思います。よく連携が必要と言われますが、連携が何かと考えた場合、みんな同じことをやることではないのです。先ほど、高齢者が見守りに出られますが、保護者は物理的に無理です。そうすると、保護者は感謝する気持ちを伝えることをする。例えば、昼食会を開いたり、手紙を書いたりするなど、同じ目標に向かって、やることは違っても、できることをやって、やっていることをみんなに伝えるようにすることが大事だと思います。最後に、男性は不器用で、孤立死の7割は男性ですから、男性を地域活動にどうやって引っ張り出すかが非常に重要だと思います。それには活躍できる場、おしゃべりの場というよりは、活躍できるものをつくると、いろんなところがつながってくる気がします。

(瀬戸口教授)

長い間に渡って、議論をさせていただきました。今日のテーマは地域の居場所づくりです。このコミュニティセンターのオープンを記念して、このフォーラムを開かせていただきました。

まちづくりというのは、それぞれが自分の何らかの役割があって、できることがあるのだと思います。このコミュニティセンターでも、地域のボランティアとしてコーヒーを出すという方もいらっしゃいますし、自分の描いた絵を飾られる方もいらっしゃいます。関わり方は人それぞれ違うと思いますが、何かしら皆さんの自分の中の関わり方があるのだと思います。そういうものを見つけて、まちづくりを進めていく。あくまでも強制ではなく少しずつ自分の役割を見つけて地域に関わっていくということができないのではないかと思います。今日お集まりいただいたパネリストの方の話もそういうことだったと思います。強制ではなく、できることをやって、結果としてこうなった。それで、まちづくりというのは良いのではないかと思います。是非とも、そういった、ゆるいまちづくり、ゆるいコミュニティというものをこれから皆さんと一緒に進めてまいりたいと思います。今日は、長い間、御清聴ありがとうございました。

(小野 石狩振興局建設指導課長)

瀬戸口先生、パネリストの皆様ありがとうございました。それではせつかくの機会ですので、ご質問がございましたら挙手いただけますでしょうか。

(聴衆)

本日は、5人の皆様のお話、非常に参考になりました。話の中で「できることはすぐやる。失敗したらすぐやめる。」というお話があったと思います。きっかけとしてやりやすいことのヒントになることがありましたら教えていただきたいと思います。

(松村氏)

成果の「見える化」みたいなことを一生懸命やると良いと思います。先ほどの安全安心のアンケートですが、2年おきにやっていますが、間違いなく減っています。防犯活動は、続けるのが大変で辛い活動ですが、成果が分かると地域の役に立っていると感じることができます。全てを「見える化」するのは難しいですが、できるだけそういう姿勢で取り組んで、成果を見えるようにし、駄目であれば改善したりやめるというのが良いと思います。

(船戸氏)

失敗するのは、楽しくないからです。ボランティアは楽しくなければなりません。楽しくなければすぐやめる。以上です。

(瀬戸口教授)

それでは、そろそろ締めたいと思います。

(小野 石狩振興局建設指導課長)

ありがとうございます。以上で質疑を終了させていただきます。会場の皆様方から大きな拍手をお願いいたします。閉会に当たりまして、恵庭市の原田市長から御挨拶いただきます。

閉会挨拶 (原田 恵庭市長)

ただ今紹介いただきました原田でございます。今日は、まちづくりフォーラム、恵庭でオープン記念ということで開催いたしました。当市と石狩振興局の主催でございます。大勢の皆さんに御出席いただきましてありがとうございます。さらに瀬戸口先生に基調講演をしていただき、また、5人のパネラーの方に御意見をいただきました。楽しい時間を過ごすことができました。

このセンターは、先月16日にオープンしました。この地域は、新しい区画整理が行われて、家も新しい家が多く、子供達も非常に多い地域です。そうしたことになると、やはりコミュニティづくり、居場所ということになります。もしお金があれば、老人憩いの家を作ろう、地域会館を作ろう、児童館、学童クラブも用意しようということになりますが、いかんせんそうしたことにならない、一度に複合施設を作ろうということになりました。それは私どもの事情ということもありますが、しかしながら、こうしたふれあいセンターができたことによって、お年寄りも老人クラブの例会を開く、町内会の会合を開く、一方で、子供達がここのホールで自由に遊べる児童館の機能もある、さらには毎日学童クラブに通う子供達もいる、あるいは、ふらっと来てコーヒーを飲んだり本を読む、といったセンターにすることができました。

むしろ個々に作るよりも素晴らしい交流の場を作ることができるのではと、そんな風に思っております。この会館の持つ可能性がずいぶん広がったような気がしております。

そうした「ゆるいコミュニティ」というコンセプトを立ち上げ、熱心に協議していただいた瀬戸口先生をはじめ、泉谷さんや老人クラブの皆さんに本当に感謝したいと思います。いよいよこれから運営、このセンターをどのように活かしていくかということが始まります。子供からお年寄りまで自由にいつでもいられる場所ですから、大変厳しい問題も起きるかもしれません。それを克服して「とにかくあそこに行こう、あそこで集会をやろう、音楽会、読書会をやろう」というように活かしていただきたいと思います。それが地域のコミュニティをつくることになるのだらうと思っております。そうした意味で、このフォーラムを参考にさせていただきました。これを活かしてこれからの地域づくりに励んでまいりたいと思っておりますので、御参加の皆さんの御支援、御協力を心から賜りながら、挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

(小野 石狩振興局建設指導課長)

以上をもちまして本フォーラムを終了させていただきます。皆さん御参加ありがとうございました。

以上

(参考)

恵庭市黄金ふれあいセンター

開館時間 午前9時～午後10時

休館日 毎月第2・第4月曜日、年末年始

住所 〒061-1409 恵庭市黄金南5丁目11番地1

電話 0123-32-2081

FAX 0123-34-0025

<http://www.city.eniwa.hokkaido.jp/www/contents/1366349313096/index.html>